

明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究

—— その4・青森県津軽地方の学校視察と演説 ——

A Study of Inspector Nakagawa's Educational Inspection in “DAINI-CHIHOBU” (The Second Region) in 1891

—— 4. His Course of Educational Inspection and Speech in Tsugaru Region Aomori-Ken ——

麻 生 千 明

Chiaki Asoh

はじめに

本稿は、「明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究」の「その4」として、中川の宮城県、岩手県、青森県（八戸、青森）、北海道の巡視と演説についての考察¹⁾の続きとして、7月9日から13日までの5日間にわたる青森県津軽地方の学校視察と演説について考察するものである。

1. 黒石町と弘前市の学校視察の状況

(1) 黒石町の学校視察

13日間にわたる北海道の巡視を終えた中川は、7月9日（木曜）に函館から船で青森に渡り、黒石と弘前など青森県津軽地方の学事巡視をおこなう。当日の『東奥日報』に「中川文部視学官本日函館より来青し直ちに南津軽郡黒石に赴く筈なりといふ」²⁾と報じられており、また中川の『日記』の末尾メモにも「九日朝青森ニ着シ直ニ黒石ニ至リ泊ス」と記録されている。この日、中川は黒石において南津軽郡本郷村の竹鼻尋常小学校と字十村の栄進尋常小学校の2校³⁾を視察している。中川の『日記』に「生徒途上ニ迎ヒニ出ツ」（竹鼻尋常小学校）、「生徒途上ニ旗ヲ立テ迎ヒニ出ツ軍歌ヲ謡フ」（栄進尋常小学校）とあるように、両校において生徒たちの出迎えを受けている。栄進尋常小学校では生徒たちが旗——おそらく日章旗——を立てて軍歌を歌って出迎えており、まさに軍国主義的雰囲気伝わってくるようである。

両校の視察記録であるが、竹鼻小学校については「校舎ヲ一覽ス狭少陋古ナリ」と校舎が狭いこと、栄進小学校については「校舎ヲ一覽ス 勸語ハ別室ニ奉置シアリタリ教員中々熱心なり」と『教育勸語』の奉置状況や教員の様子が記されている。授業視察の記録はなく、両校とも校舎の視察だけであったようである。この日は黒石に宿泊する。

翌10日（金曜）は黒石町内の黒石高等小学校と黒石尋常小学校を視察、『日記』に両校で視察した授業につい

ての記録がある。まず黒石高等小学校について、4年の算術は「利息算」で、「説明明瞭ニシテ親切 生徒善ク了解運算早シ」と教師の授業法が好評されている。3年の理科は「石黒 黒鉛 金剛石」など鉱石に関する内容、1年の図画については「最初ノ運筆ハ極メテ軽クスルヲ良トセンカ?」と意見を記している。1年の読書は「亜米利加農夫」についてで「粗ホ得タレトモモタシ」と記している。2年の習字については「中筆ヲ用フル者多シ 大筆モ式ニ人アリ」と使用している筆について記している。中川は、6月10日に盛岡で開催された岩手教育協会における演説でも、実用の観点から細筆による習字を勧めており、⁴⁾後述するように弘前や秋田県の視察においても、一般に筆が太過ぎることが頻繁に記されている。その他2年の英語、女生徒の裁縫、男生徒の体操、女生徒の唱歌などを視察している。

次に黒石尋常小学校における記録をみると、4年女子の作文は「出物注文之文」、4年男子乙の修身の授業は「善人悪人ノ別」、3年男子丙の算術は「乗 珠」、すなわち珠算の乘法がおこなわれていたようであるが、「説明ヲ後ニスヘキ? 前ニスルトキハ或ハ早合点スル者ナキヤ」と教師の授業法について意見を付している。その他4年男子甲の作文の題材は「入学」、3年男子乙の算術は「乗」、2年男子乙丙の読書、1年女子の唱歌については「長シ」と注記している。3年男子甲の体操は「矯正 啞鈴体例」、1年男女の「遊戯」は「軍歌ニテ運動」と記している。その他に1年男子乙の修身、1年男子甲の読方なども視察している。

この日の学校視察は午前中で終わり、午後は黒石高等小学校で教育講演会が催されたようである。7月14日刊の『東奥日報』に「黒石に於ける中川文部視学官」との見出しで「文部視学官中川元氏にハ過般函館より当青森に着し去る九日南津軽郡黒石町に趣き翌十日午前第一高等小学校ならびに尋常小学校を巡視し終り午後は黒石高等小学校校上に於て同郡内各小学校教員町村長及び教育

篤志者凡そ百有余名を招集し教育上に関する演説ありて後ち私立教育会員には同氏を招待し向陽軒に於て盛宴を開催したりといふ」⁵⁾と報じられており、また『黒石小学校百年史』掲載の「年表」にも「明治二十四年七月十日、中川文部視学官来町、黒石高等小学校に於て、教育講演会を催せり。」⁶⁾との記録がある。この日も黒石に宿泊。

(2) 弘前市内の学校視察

翌11日(土曜)早朝に中川は黒石を出発、弘前に至り11、12の両日は弘前市内の学校を視察する。上掲の『東奥日報』と同号に「弘前に於ける中川文部視学官」との見出しで次の記事がある。

去る十一日中川文部視学官は南津軽郡黒石町を出発し同日午前九時弘前に到着したるや否や弘前高等小学校に趣き授業法を視察し引き続き時敏朝陽城西三尋常小学校を巡回し終へたるか翌十二日午前八時同市大成尋常小学校に趣き夫れより和徳尋常小学校を巡視したる由なるが同日午後一時より高等小学校内に開設せる弘前私立教育会に趣き教育上に関する演説ありしが今まその大要をきくに先づ弘前地方教育の一般に進捗するを述べ次に小学校教員任用法の大切なことおよび少年子弟の妄りに東京に遊学する悪弊を痛嘆し地方に勉学せしむるの急務なるを論して退壇せりと右終つて茶話会を催ふし更らに延年桜に於て招待会を開きたるに来会者ハ七十余名頗ふる盛会なりしと云ふ⁷⁾(傍点引用者)

すなわち中川は、11と12の両日にわたって弘前市内の学校を視察、12日の午後は弘前私立教育会で演説をおこなっている。ここでの演説についてはのちに考察するとして、まず弘前市内の学校視察の模様について考察することにする。上の記事によると視察した学校は弘前高等小学校をはじめ時敏、朝陽、城西、大成、和徳の5つの尋常小学校であり、中川の『日記』の記録と一致する。なお『弘前市立弘前中学 東奥義塾沿革誌』に「明治二十四年七月 中川文部省視学官来塾授業ヲ視察セリ」⁸⁾との記録もあり、東奥義塾も視察したものと思われる。以下、中川の『巡視日記』を中心に、学校視察の模様について考察することにする。

まず11日(土曜)は最初に弘前高等小学校を視察する。『日記』によると読書、算術、地理、英語、英習字、裁縫、歴史、図画、体操(兵式、柔軟)など多くの授業を視察し、概ねaあるいはab、bienなどの評を記している。ただし1年の英語習字についてはm(悪い)、tout mauvais(まったく悪い)と評を付している。しかし全

体的には良好だったようで、bien! bien! bien!と連記している。また「弘前学校ハ其目的トスル處蓋シ人間ヲ教育シテ実地ニ用立タシムルニアルカ如シ故ニ事々精心ヲ込メテ教育ヲナスト見ユ生気勃々トシテ堅実ナル教育ナリト云フベシ」との長文の記述があり、実用を重視した同校の教育方針について好評している。

次に時敏尋常小学校において習字、算術、作文、体操などの授業を視察している。4年の体操は「啞鈴」で「内女生徒数人鞠ヲ突ク」とある。また1年の作文は「つくゑの上にかみあり かみはつくゑの上にあり」との文を綴らせていたのであろうか。3年の算術は「筆算」であり、2年の作文は「岩木山 a 説明」と記されており、地元で「津軽富士」として知られる岩木山を題材に作文がおこなわれていたようである。明治24年11月に制定公布される『小学校教則大綱』には「作文ハ読書又ハ其他ノ教科日ニ於テ授ケタル事項、児童ノ日常見聞セル事項及処世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ行文平易ニシテ旨趣明瞭ナラシメンコトヲ要ス」⁹⁾と、作文の題材として「児童ノ日常見聞セル事項」ということが規定されるが、岩木山はまさに津軽の子どもたちが常時目にしているものであり、まさに地域性を示すものとして注目されよう。

ところで中川の『巡視日記』をみると、「作文科」については、その題材や内容についての記録が豊富である。まず題材のみを記したものを列記すると「贈物」(5月22日 宮城師範学校尋常科3年)、「留守見舞」(同4年)、「馬牛」「椅子」「牛」(5月25日 立町高等尋常小学校尋常科)、「物指」(6月1日 一ノ関尋常小学校3年)、「馬」(6月10日 盛岡第三尋常小学校3年)、「鮎ヲ贈ル文」(6月16日 北閉伊郡小本村尋常小学校2年)、「鮎」(6月18日 宇部尋常小学校2年)、「椿」(6月29日 私立若山小学校)、「衣服」(7月7日 私立尋常小学校4年)、「入学」(7月10日 黒石尋常小学校4年)、「鋸」(7月11日 朝陽尋常小学校)などである。

次に比較的長いテーマの記録を列記すると、「本級欠員生アルヲ問ハレシニ答フル文」(5月23日 東二番町高等小学校1年)、「私用文 火事見舞之文」(5月25日 木町高等尋常小学校4年)、「兵隊ニ合格セン人ヲ賀する文」(6月1日 西磐井高等小学校4年)、「田植手傳ニ人を雇ふ文」(6月7日 伊手尋常小学校4年)、「桜山神社参詣ニ友ヲ誘ふ文」(6月9日 盛岡高等小学校1年)、「田植ニ人ヲ頼む文」(6月18日 宇部尋常小学校)、「病氣見舞ノ文」(6月26日 宝高等尋常小学校高等科2年)、「頼置たる事を問合する文」(6月29日 私立幸尋常小学校3年)といった具合で、「処世ニ必須ナル事項」、すなわち日常生活への実用性ということを意

図していることがうかがえる。

なお、中川が視察した弘前市内の1つの高等小学校と5つの尋常小学校は、いずれも明治の初期に創設され、かつ明治10年代から20年代にかけて校舎が新増築されている。朝陽小学校が最も早く明治11年、城西小学校が明治16年、大成小学校が明治18年、時敏小学校が明治21年、和徳小学校が明治22年に西洋風の校舎が新築されており、⁽¹⁰⁾したがって校舎施設はいずれもかなり立派なものであったと思われるが、施設設備だけでなく教授・管理もゆき届いていたようである。明治20年の『教育報知』に「陸奥国中津軽郡弘前学事の状況」と題して「市中に尋常小学校五校高等小学校一校あり尋常小学校は孰れも稍教授と管理の行とよき居るやうなれとも就中自敏朝陽和徳の三校を以て最可なりとす右三校とも大抵師範学校卒業生を以て教員に充て教育上名望ある人物を以て教員とす故に校長教員の間甚だ親密に着々歩を進むる者の如し何れの校にても慨するに毎級六十人以上を担当せり然れとも其管理の行届き教授の鄭重なるを見れば亦以て教員の熱心勉強を知るに足る」⁽¹¹⁾とあり、とりわけ「高等小学校は昨年の新築に係り位置の宜き規模の宏壮なる実に本県中希有の学校にして生徒扣所あり応接所あり書籍室あり器械室あり事務所あり遊歩場は広闊にして幾百人の生徒を遊はすを得」⁽¹²⁾と報じられていた。なお弘前高等小学校と時敏小学校は、中川が視察した明治24年頃に生徒増に対応して増築もおこなわれたようである。明治24年6月刊の『東奥日報』に「弘前市高等小学校は年々生徒を増加し来りし為めに教場も狭隘となり教授上甚だ不都合なればとて一昨二十二年教場を増築したるも尚ほ入学生徒の数多ければ本年は二教場を新築せんとて既に工事に取りかかりたることなり」⁽¹³⁾とあり、また同紙別号に「弘前市時敏尋常小学校ハ今春以来毎月入学生徒の増加して先月に至りてハ殆んど四百五十余名の多きに達したること故漸次教場の狭隘を来たし教員扣所を以つて教場に充て尚ほ一人の教師を増聘したることなるか昨今も引きつゞき入学の生徒ありていよゝゝ教場の手狭を来たすの盛況に立ち至りし故来年は是非とも校舎の増築に取りかかりらるへからずとて同学区議員諸氏にハ何つれも談し合へりといふ」⁽¹⁴⁾と報じられている。明治20年代には弘前市の小学校の就学生徒数もかなりの増加傾向にあったことがわかる。

中川は次に朝陽尋常小学校を視察している。⁽¹⁵⁾同校は弘前において最も早く創設された学校で、当初「一番小学」と称された。学区には富裕商人と旧藩時代の高級武士であった貫属士族で占められており、市内で最初の立派な西洋造りの校舎は他の学校の羨望的であったという。⁽¹⁶⁾『日記』によると中川は同校において珠算、習字、

読書、作文、書方、数方、体操などの授業を視察している。4年の体操は「啞鈴」で「a」と評が付されている。3年の習字については「手本悪シ 黒板白キ上ニ書キタルカ故分明ナラス」とある。黒板もかなり粗悪なものが使用されていたようであり、白墨（チョーク）の粉も充分落ちていなかったのであろうか。なおそのようなことは当時、児童の近視眼の遠因にもなっていたようである。⁽¹⁷⁾2年の習字も同様に「手本頗ル悪シ」と記されている。よほど習字の手本が適切ではなかったのであろう。

次に視察した城西尋常小学校でも書方、習字、読書などの授業を視察しているが、習字について「肱ヲ付ク悪キ僻ナリ」と生徒の学習の姿勢がよくないことが記されている。

中川は翌12日（日曜）には大成尋常小学校と和徳尋常小学校の2校の授業を視察している。『日記』に「日曜日」と記されているように、この日は日曜日であったが、視学官の視察ということで生徒も登校させられ授業がおこなわれたのであろう。そのようなことはしばしばであったようである。⁽¹⁸⁾

さて大成尋常小学校について『日記』に「御写真等頂戴ニ付奨励之事」とある。ここに「御写真」とあるのは多分天皇・皇后の「御真影」のことと思われる。『弘前市教育史』によると各学校に御真影が下賜されるようになったのは明治21年頃からで、青森県では同年6月5日に青森県尋常師範学校に下賜されたのが最初であった。次に同年7月、青森県尋常中学校に対して下賜されており、弘前市内の小学校では明治23年4月11日の弘前高等小学校への下賜が最初で、そのことが他の尋常小学校に羨望の念を抱かせ、各尋常小学校は競って御真影の下賜を宮内庁に請願したという。中川はここで御真影の下賜に向けての「奨励」の弁を述べたものと思われる。弘前市内の5つの尋常小学校はそろって明治25年6月28日に御真影の下賜を請願、下賜されたのは半年後の12月23日のことで、県下87の尋常小学校に下賜された。⁽¹⁹⁾

同校について『日記』にはまた「新築将ニ成ラントス 寄附金ヨリ成る 皆坐シテ居ル」とも記されている。同校は前年の明治23年3月4日に火災で校舎焼失、それも政争にまつわる放火との噂もあり、新築工事に取りかかったものの途中で工事中断などの曲折があったが、⁽²⁰⁾中川が視察した明治24年7月頃には校舎もほぼ完成していたものと思われる。明治24年7月1日刊の『東奥日報』に次の記事がある。

客年祝融の災にかゝりたる弘前市大成尋常小学校ハ過般暑は落成するに至たりしを以つて数日前より新校舎に移転し授業に取りかかり居たるよし校舎の構

造は凹字形の和洋折衷形にて空気の流通も宜ろしく一見壯嚴の建物なり又内部の教場及扣場等の配置分合も其宜しきに適ひて授業上何等の差支なし生徒は日々入学の数を増し追々盛大に立ち至るべき模様なれば一時祝融の爲め全棟烏有に帰し種々事情の起りたる事ありしも学校職員は申すに及ず^(マサ)地方有志家の尽力に依り新校舎も首尾能く落成し諸事の経営も畧は緒に就きたれば今后は愈々学事の進捗を見るに至るべしといふ⁽²⁰⁾

同校の落成式は明治24年11月12日に举行されるが、⁽²¹⁾すでに7月頃は校舎もほぼ完成しており、新しい校舎で授業もおこなっていたものと思われる。『日記』に「皆坐シテ居ル」とある。また『日記』に「寄附金ヨリ成る」とあるように、建築費総額2825円42銭5厘のうち2659円28銭8厘、すなわち95%は学区民の寄付によるもので、市当局から支出された金額はわずか166円13銭7厘に過ぎなかったという。⁽²²⁾校舎建築にける学区民の熱意が窺えよう。

さて『巡視日記』によると、中川は同校で修身、習字、書方、算術、珠算、作文、体操、女生徒の裁縫などの授業を視察している。1年の書方は「チリツモル」、4年の修身は「長幼序アリ」、1年の書方は「柿ノ画」、4年の体操は「啞鈴」で、ほとんどの授業について「a」との評が付されており、また全体に bien と記されており、授業も全般に良好であった。

次に中川は和徳尋常小学校を視察している。同校は『学制』頒布の翌明治6年(1873)に創立、朝陽の次に創設されたゆえ当初「二番小学」と称された。校舎も朝陽小学校への対抗心から、明治21年1月新校舎の建築に着手、教員と学区民の寄付により総工費は1555円1銭、半年で完成したその校舎は二階建西洋造り、幅四間、長さ二十四間、教室七室、その他職員室、小使室等を設け、旧校舎のうち比較的新しい一棟を改築して生徒控室とした。全館を白ペンキで塗り、特に玄関の上が四層桜となっているのが異彩を放っていたという。⁽²³⁾しかも同校は古くからの資料が現存していることでも希有な学校である。中川は明治19年7月にも同校を視察しており、19年7月23日の同校の『学校日誌』に「文部省視学官中川元来校各教場の授業を視察す」と記録されていたが、⁽²⁴⁾それからちょうど5年ぶりの今回の視察である。中川の今回の同校視察についても『明治二十四年 記録簿 和徳尋常小学校』と表記された学校日誌の明治24年7月12日の箇所に「十二日 日曜 中川文部省視学官臨校各級教授法ヲ巡視シ終テ体操 四年生男生

唱歌 四年生女生 一覧ノ上帰ラレタルハ十二時過ナリシ」と記録されている。なお翌13日は代休としたのであろう、「休業」と記されている。

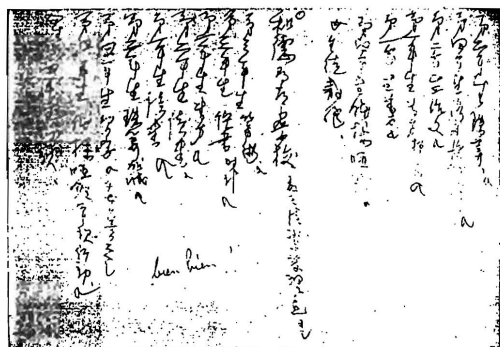
資料 和徳尋常小学校『記録簿』
(弘前市立図書館所蔵)



なお次は同校の視察の関する『日記』の記録である。

和徳尋常小学校 最モ清潔管理ノ点ヨシ
 第三年生 算術 a
 第三年生 讀書 時計 a
 第一年生 書方 a
 第二年生 讀書 a
 第一年生 讀書 a bien bien!
 第二年生 珠算 加減 a
 第四年生 習字 a 手本ヲ善クスヘシ
 第四年生 体操啞鈴軍歌行動 a
 女生 第四年生 唱歌

資料 中川の『巡視日記』における和徳小学校の記録



上の『日記』にもあるように、中川は今回、同校において多くの授業を視察したのであるが、『記録簿』に記録されているように特に4年男子の体操と4年女子の唱歌を熱心に視察したものと思われる。4年生の体操は啞鈴体操で軍歌に合わせておこなわれていたようである。唱歌と体操は特に森文政期あたりから重視され、本格的に実施されるようになった教科であり、中川視学官のみならず県の官吏等の巡視においても体操と唱歌は注目の対象であった。⁽²⁴⁾なお弘前市内の学校で風琴(オルガン)を最初に購入したのは大成小学校であったが、和徳小学校も大成への対抗心から三上校長が風琴購入に尽力、寄付金を集め自から上京して風琴を購入、明治23年7月5日には第一回唱歌会が盛大に举行されたという。⁽²⁵⁾

また『日記』の冒頭には「清潔管理ノ点ヨシ」と書かれている。中川の今回の巡視においては、各学校の清潔管理の状態も重要な視察点であり、前稿⁽²⁶⁾でも考察したように特に岩手県僻村の学校の衛生状態は全般に劣悪であったが、和徳小学校は清潔管理の状態が極めて良好であったようである。同校では生徒による掃除も励行されており、ふだんからも清潔管理には留意していたようである。『記録簿』の明治24年1月27日の箇所に「各教室へ大概生徒ニ於テ掃除致居ガ往々生徒机上ニ塵埃堆積セルヲ見ル時ハ小使ニ命ジテ掃除セシメン「ヲ望ム」とある。また次は明治24年3月27日の記録である。

庭内ノ小石ヲ扣所ノ後ヘテモ片付サセタキモノナリ
往々四方ニ散在シテ歩行ノ妨害ヲスルヤウニ考ヘラ
レマス依テ全庭ノ掃除スルト共ニ扣所ノ後ヘテモ取
方付ケタキモノナリ当又魚市ノ塀ハ亦々破損シ彼ノ
不潔ナル市場ノ目ニ触ルモノミナラズ汚穢不潔ナル
空気ノ往々睡気ニ連シテ吹き来ル漸ク僅ニ開キタル
北方ノ窓櫺ヨリ臭気ノ来ルアレバ該當者ヲ呼ヒテ嚴
禁ノアラン「ヲ望ム

上記にあるように、同校は魚市場に隣接⁽²⁷⁾していたこともあって、清潔法にはとりわけ注意する必要もあったようである。

また中川の『日記』に、同校の授業のほとんどすべてに「a」と付され、加えてbien bien!と記されているように授業は全般に良好であったと思われるが、『記録簿』にも次のように授業中の規律に関する記録がある。

生徒起立挙手ノ姿勢不正ナルモノハ務メテ矯正スル
様御注意ヲ乞フ又音声低クシテ聞取り難キモノハ明
瞭ニ云ハシムル様御注意ヲ乞フ(明治24年7月10日)

生徒答ヲナスニ起立ノ姿勢正シカラザルモノ多シ是
等矢張着席ノ姿勢ヲ採リ双手ヲ前ニ組ミ下ケル様ニ
致シタシ(明治24年12月1日)

中川の『日記』にも、6月16日、岩手県旧老尋常小学校を視察した際に「○起立シツム発音スルハ如何ノモノニハ或ハ静坐シ発音スルニ如カサルヘキ?」と記しており、授業時の規律に関しては特に生徒の発表時における挙手、起立の姿勢が問題視されていたことがうかがわれる。

以上、中川の黒石町と弘前市における学校視察の模様について考察してきたが、特に体操においては「啞鈴」体操や遊戯の実施、軍歌に合わせての運動が目立つものとして特筆されよう。したがってここであらためて啞鈴体操や遊戯の実施状況、軍歌の流行について考察することにする。

2. 体操遊戯の実施状況と軍歌の流行

(1) 啞鈴体操の盛行

和徳小学校4年の体操については「啞鈴」と記されていた。前稿⁽²⁸⁾でも指摘したように、中川の明治24年の『日記』をみると、師範付属小学校や高等小学校においては兵式体操(操銃運動)の実施記録が多かったが、尋常小学校においては専ら普通体操であり、下に列記したように「徒手体操」「柔軟体操」「矯正術」「啞鈴体操」などの記録がみられるが、特に目立つのは「啞鈴体操」である。

「高等科全生徒 柔軟体操」

(5月23日 仙台市東二番町高等小学校)

「高等女子一年二年 体操啞鈴」

(5月27日 南材木町高等尋常小学校)

「第二年生 甲 体操啞鈴」

(6月1日 岩手県西磐井高等小学校)

「高等第一年生 徒手体操」「尋常第3年生女生体操遊戯」

(6月25日 青森町高等尋常小学校)

「第四年生体操、啞鈴」

(7月2日 小樽郡手宮尋常小学校)

「男甲三年体操矯正 啞鈴体操例」

(7月10日 青森県黒石尋常小学校)

「全(第三年生…注)兵式体操 ab 柔軟」

(7月11日 弘前高等小学校)

「第四年生体操普啞鈴□ a 内女生徒数人鞠ヲ突ク」

(7月11日 弘前市時敏尋常小学校)

「第四年生体操啞鈴 a」

(7月11日 弘前市朝陽尋常小学校)

「第四年生体操啞鈴 a」

- (7月12日 弘前市大成尋常小学校)
「第四年生 体操啞鈴 軍歌行動 a」
(7月12日 弘前市和徳尋常小学校)
「高等第三四年生体操、普通矯正術 股ヲ拳ニテ打
ツ強シ」 (7月16日 秋田市明徳尋常小学校)

特に弘前市内の尋常小学校4校のうち3校で4年の体操を視察しているが、いずれも啞鈴体操である。また「啞鈴」体操の記録8つのうち実に5つが黒石を含めた津軽地方である。弘前はじめ津軽地方では啞鈴体操が極めて盛んであったことが指摘できよう。ところで器械体操の普及は、明治11年の「体操伝習所」の設立以降のことである。明治初年の体操はせいぜい業間に嬉遊、放散させる程度であったが、「体操伝習所」の設立により身体健康増進という観点から軽体操、すなわち軽器具（啞鈴、球杆、木環、棍棒など）を利用した体操が普及した。⁽³⁰⁾弘前地方でも体操伝習所出身の教員の赴任を契機に小学校でも体操が盛んになったという。体操が学科として実施されたのは明治14年8月、和徳小学校が最初で、当初は隊列行進程度であったが、翌年には啞鈴体操や球杆体操が実施されるようになった。明治15年の和徳小学校の備品台帳に「啞鈴」「球杆」などの体操器具が記載されている。⁽³¹⁾

ところで中川の『巡視日記』をみると、同じ器械体操でも「球竿」や「棍棒」の使用に関する記録はみられず、すべて「啞鈴」体操であるが、それには当然何か理由が考えられよう。羽山好作は啞鈴体操について「是れ亦一動一撃愉快なる運動にして、徒手の如く身体の姿勢を正ふし、啞鈴の軽重に因て老若及び小児に行ふを得べし、古へ剛強を盛ならしむる時代には、鉄を以て造りたれども、当時は木を以て造るに至りしといふ、彼の球竿棍棒等の種類ありと雖ども、何れも児童の年令により、選択すべきものにして、尋常小学校の如きは、通常男女共啞鈴体操を以て極度とすること可なるべし、」⁽³²⁾と、啞鈴体操は性別にかかわらず小学校すべての学年生徒に容易に実施しうるものであると述べている。仙台市の東二番町高等小学校々長真山寛も、体操は身体を強健にするのみならず心意の発達も促し「全体ノ氣力漸次ニ発達シテ柔軟、壯健、輕快、敏捷ノ人トナリ且無病長寿ニシテ生涯ノ幸福ヲ保タシムル」⁽³²⁾ことから女子にも必要であること、そして「現時小学校ニ於テ採用スルコロノ諸体操術（徒手体操、啞鈴体操、棍棒体操、球竿体操等）ノ如キハ之ヲ女子ニ適用スルモ敢テ不都合ハナカルベシト信ゼリ」⁽³¹⁾と器械体操が女子にも適切であると述べていた。

(2) 軍歌に合わせての運動

和徳小学校4年の体操については「軍歌行動」とも記されており、軍歌に合わせて体操をおこなっていたようである。7月10日視察の黒石尋常小学校についても「第一年生 男女 遊戲 軍歌ニテ運動」と記されており、6月26日に視察した北海道函館の寶尋常小学校についても「尋常第四年 軍歌 行進シツゝ謡フ甚タ変ナリ」と感想が記され、また同日視察の私立函館幼稚園についても「遊戲 日常歌 軍歌 a b」と記されているなど、体操や遊戲の際に軍歌を謡ったり、軍歌に合わせておこなうことが多かったようである。森文政期の明治20年前後から各地の小学校で運動会がさかんにおこなわれるようになるが、筆者がかつて宮城県について考察した結果によると⁽³³⁾、複数学校連合による開催が多く、会場はおおむね最寄りの広場であった。そして生徒たちはそれぞれの学校に集合し、会場まで隊列を組んで行進をおこなったが、その際はたいてい軍歌、体操歌、運動歌に合わせて行進した。また森文政期より兵式体操が普及するが、兵式体操の際にも軍歌が用いられていたようである。某の回顧録に「斯くて兵式体操は単に師範学校のものに止らず、進んで之を小学校の課程に加へたり、茲に於て老ひたる教師皆共に銃を肩にし、剣を腰にし、兵式体操の講習伝授は全国各地に流行し、否是れを努むることを余儀なくせられたる所にして、就中銃剣術の如きは、当時吾人の先生たりし人が、熱心に稽古せられたりしものゝ中、最も面白かりしもの、今尚其姿は眼中に映じて去らざる所なり。…果然吾人は兵式体操を教授せられたり、銃を担ひ、肩をいからし、軍歌を謡ひて体操せしは、子供心に最も愉快なりし所なり。」⁽³⁴⁾（傍点引用者）とある。

明治20年代における軍歌の流行状況について、明治21年の某論説は「今日我國ノ民間ニ行ハル、所ノ業唄類ハ其句調猥褻ニシテ何人ニモ分リ易キガ故ニ、小学生徒ヲシテ是等ノ歌ヲ聞カシムルトキハ、自然猥褻ニ流レテ其性行ヲ害スル」多シトテ、近頃ハ小学校生徒ニ軍歌勸学歌ナドヲ教ヘ、快樂ノ間ニ不知不識徳性ヲ誘掖シ、勇氣ヲ増発セシメン」ヲ謀リ、生徒ヲシテ類ニ之ヲ歌ハシムル様ニナリ、今ハ如何ナル田舎ノ生徒ニテモ「ス、メヤ、ス、メ、モロトモニ、タマチルツルギ、ヌキツレテ」ナド、最ト勇シゲナル歌ヲ歌フニ至リタルハ教育上喜バンキノ次第ナリ。」⁽³⁵⁾と述べている。明治20年代末には「高等生の軍歌を真似んとて、無暗に幼稚生にまで、之を奨励する傾向」⁽³⁶⁾さえもみられたようである。

ところで唱歌ないし軍歌に合わせて運動をおこなうことの効果について羽山好作は、「小学校に於て課すべき体操は、其児童の年齢体質等により、種々変更すべきものなりと雖ども、概ね遊戲、普通体操、兵式体操の三種

なるべし、而して初期の児童に在ては遊戯を加へざる可らず、…幼児に課する遊戯の適切なるものは、通常唱歌しつゝ遊戯をなすもの可なるべし、即ち児童をして一定の環列をなさしめ、歌節に合する如く歩調を整へ、以て快活に運動せしむるの法是なり、然るに唱歌を課せざる学校に於ては、此困難を訴ふるものなきにあらずと雖ども、児童は元来歌謡を好むものなるを以て、卑近にして風教に害あらざる歌謡は、皆遊戯に採用すべく、軍歌の如きは勇気を鼓舞するに必要なるを以て、特に可なるものなり」⁽³⁷⁾（傍点引用者）と、児童は元来歌謡を好むものであること、とりわけ軍歌は勇気を鼓舞するという点で極めて適当であると述べている。さらに羽山は「教授上一般の注意」として13項目あげた最後に「軍歌」について「行進中に在りては、軍歌を合唱せしめて全隊の歩調静粛一致せしむべし、然れども勇気に伴はれて粗暴に陥り易きものなれば、深く注意して徳性を毀損せざる様注意せざるべからず。」⁽³⁸⁾と行動の統一をはかる利点をもつ反面、勇気の鼓舞が粗暴に陥り、徳性を毀損することのないよう警告している。

また軍歌の効用について某論説は「千言万語口を酔くして軍情を談るよりは、寧ろ一篇の軍歌を誦するの児童に入り易きに若かず、而して児童の心情に感染するの至深なる、実に軍歌に若く者は之れ有らざるなり、看よ、一声高く、「膺てや懲らせや」と叫ぶ時は彼等の眼は自からにして血走るの概あり、…」⁽³⁹⁾と児童の心情の喚起に大いに効果があること、とりわけ敵愾心を鼓舞するうえで最も効果があると述べる。ただし一時的、感情的な敵愾心のみに放任したままでは彼らをしてただ「無頼漢」たらしめ、生涯を誤らせる危険性があると注意、「故に学校及び家庭に在ては此際大に児童の敵愾心に注意し、先づ如何にして敵愾の念を晴らすべき乎、即ち自今以後何に依て敵人と競争すべきか的手段を教ふるは、実に目下の急務なるべしと信するなり」⁽³⁹⁾と述べている。

なお最初にも紹介したように、中川の『日記』中、南津軽郡栄進尋常小学校において「生徒途上ニ旗ヲ立テ迎ヒニ出ツ軍歌ヲ謡フ」との記述がみられた。生徒たちが軍歌を謡うのは体操や唱歌の時間だけではなかった。いたいけな子供たちが日の丸の小旗を振りながら軍歌を歌う光景——そこには明治20年代の軍国主義が昂揚していく時代の雰囲気が見取されよう。中川の『日記』をみると、特に弘前はじめ津軽地方において軍歌の流行が目立つが、明治30年における第八師団の設置を契機に一層濃厚になる「軍都弘前」という地域性の予兆をそこにみることのできるのではないだろうか。⁽⁴⁰⁾

(3) 低学年および女兒の遊戯

中川の『日記』をみると、以下に列記したように尋常科低学年ないし幼稚園において「遊戯」が実施されていることがわかる。

「第二年生 遊戯生徒」

（6月10日 盛岡第一尋常小学校）

「尋常第貳年女生 体操遊戯」

（6月25日 青森町高等尋常小学校）

「遊戯 通常歌 軍歌 a b」

（6月26日 私立函館幼稚園）

「遊戯」（7月3日 北海道創成学校付属幼稚園）

「第一年生男女遊戯 軍歌ニテ運動」

（7月10日 黒石尋常小学校）

ところで明治初年以來の「教則」等における「体操」に関する規定をみると、まず明治5年（1872）『学制』第二十七章に、「下等小学」における教科が14列記された最後に「体術」があった。そして各教科ごとの教科内容、使用教科書を明記した『小学教則』（明治5年9月8日）には「体術」についての記載はないが、翌6年の『改正小学教則』に「体操」について「毎級ニ体操ヲ置ク 体操ハ一日一二時間ヲ以テ足レリトス 射中体操法図、東京師範学校板体操図等ノ書ニヨリテナスベシ」⁽⁴¹⁾と規定される。次に明治14年（1881）『小学校教則綱領』においては「初等科ノ初ハ適宜ノ遊戯ヲ以テ之ニ充テ漸次徒手運動ニ及フヘシ 中等科及高等科ニ至テハ兼テ器械運動ヲナスベシ」⁽⁴²⁾と発達段階に応じた体操法が示される。明治19年（1886）『小学校ノ学科及其程度』では「体操ハ幼年ノ児童ニハ遊戯稍長タル児童ニハ輕体操 男児ニハ隊列運動ヲ交フ」⁽⁴³⁾となる。（なおこの「隊列運動」が明治20年1月の省令で「兵式体操」と改められる）そして明治24年（1891）に公布される『小学校教則大綱』においては「体操ハ身体ノ成長ヲ均斉ニシテ健康ナラシメ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守ルノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス 尋常小学校ニ於テハ最初適宜ノ遊戯ヲナスシメ漸ク普通体操ヲ加ヘ男児ニハ便宜兵式体操ノ一部ヲ授クヘシ 高等小学校ニ於テハ男児ニハ主トシテ兵式体操ヲ授ケ女児ニハ普通体操若クハ遊戯ヲ授クヘシ 土地ノ情況ニ依リテハ体操ノ教授時間ノ一部若クハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戶外運動ヲナスシメ又夏季ニ於テハ水泳ヲ授クルコトアルヘシ 体操ノ教授ニ依リテ習成シタル姿勢ハ常ニ之ヲ保タシメンコトヲ要ス」⁽⁴⁴⁾と規定されることになる。すなわち尋常小学校低学年においては「遊戯」が課せられ、中・高年生になるにしたがって徒手体操、器械体操、輕体操などの普通体

操、そして男児には隊列運動、兵式体操がおこなわれ、また高等小学校では男児は兵式体操、女児は普通体操もしくは遊戯が課されるのが一般であったことがわかる。

ところで「遊戯」と「体操」（普通および兵式）の相違について『教育時論』の論説「遊戯及体操」には、「天然運動トハ、即チ遊戯ニシテ専ラ快樂ヲ領得スルヲ主要トシ、人工運動トハ専ラ体力を養フヲ最要トス。」⁽⁴⁵⁾と、すなわち遊戯を「天然運動」、体操を「人工運動」とであると、両者を次のように比較している。

遊 戯	1. 遊戯ハ幼童少年ノ最嗜好スル所ニシテ最も愉快ヲ感ズル者ナリ(利)
	2. 遊戯ハ体軀ヲ不平均ニ運動ス(失)
	3. 遊戯ハ衆人ト一致和合スルノ良気風ヲ養成スルヲ得(利)
	4. 遊戯ハ各自体力ノ多少ニヨリ運動ノ度ヲ増減斟酌スルコトヲ得(得)
	5. 遊戯ハ注意力ヲ費耗スルコト少シ(得)
	6. 遊戯ハ身体ノ發育至テ低キモノニ適シ且勞苦嫌厭ノ念ヲ起サズ(得)
体 操	1. 体操ハ遊戯ノ如ク快樂ヲ覺エズ(失)
	2. 体操ハ身体諸部ヲ平均ニ運動ス(得)
	3. 体操ハ容儀整正品行方正志慮堅固ノ三者ヲ養成スルヲ得(利)
	4. 体操ハ各自ノ体力ニ関セズ課スルカ故ニ運動過不及ノ弊アリ(失)
	5. 体操ハ注意力ヲ費耗スルコト多シ(失)
	6. 体操ハ身体ヲ強壮ニ且能ク勞苦ニ堪ユルノ性ヲ養フ(得)

「遊戯」と「体操」の得失比較は上表のごとくであるが、論者は、両者を併用し「双翼両論相互ニ裨補セシメザルベカラズ」⁽⁴⁶⁾と結んでいる。

和徳小学校の『記録簿』にも、明治24年6月11日の箇所に遊戯に関する次のような記述がある。

遊戯ハ男女共学ノ学級ヲ設クル場合ニ於テ男女共学ノ遊戯ヲナサル場合或ハ上級ノ生徒ニ於テ男女共通スル能ハサル遊戯ニ於テハ実ニ其実施方法ニ困難スル次第ナリ我校ニ於テノ方法モ遺憾ナキ能ナス就テハ今後左ニ據リ施行シタシ

- 一 遊戯ハ生徒ニ一致共同シテ之ヲナスノ習慣ヲ養成スベシ
- 一 遊戯ヲナサシムルニハ生徒ヲ統制シ且ツ規律ヲ守ラシムベシ
- 一 男女共通セザル遊戯ハ男女ヲ區別シテ各々之ヲナサシメ教師之ヲ管理スルモノトス

一 但此場合ニハ生徒中ヨリ二三名ヲ撰ビ之ヲシテ交々指揮ヲ司ラシムルヲ得

一 二組合併シテ遊戯ヲナサシムル時ハ男女ヲ區別シ之ヲ分担スベシ

但遊歩場ニ於テノ遊戯モ亦之ニ準スベシ

生徒ノ管理方ヲ完全ニシテ之ヲシテ教師ノ命令ニ順從セシムル様イタシタシ

すなわち遊戯は一致共同の習慣、統制、規律養成上の効用があること、また男女一緒におこなう場合の注意事項などが記されている。また6月13日の箇所には「体操遊戯ノ時下駄ヲ履クヲ禁ス」と記されており、下駄履きで体操遊戯をする生徒もなかにはいたのであろう。なお時敏小学校では女児のみの「鞠運動」が行われていたことが中川の『日記』に記録されていたが、女子の体操についてはなかなか世間の理解を得にくい状況があったようである。「体育私見」と題する論説に「女子ノ体操ノ如キハ之ヲ課セサルノ口実一理アルモノ、如シ何トナレハ今日ノ体操ハ実ハ女子ニハ感心セサルカ如シ既ニ感心セサルカ故ニ世間ニハ之ヲ廃シテ舞蹈ヲ以テスヘント云ヒ礼義作法ヲ以テ換ヘント云ヒ中ニハ手踊ヲ以テセン杯ノ奇案ヲ出スモノモアル」⁽⁴⁶⁾といった状況を報じつつ、しかし女子の健康はすなわち国家の健康という意味から女子の体操もおおそかにすべきではないこと、したがって「思フニ旧来ノ手鞠歌（改良謡ヲ用キテ）羽子其他戸外ノ遊戯法中特ニ女子ニ適スルモノ並ニ豆囊等ハ先ツ可ナラン乎」⁽⁴⁶⁾と女子に適切な戸外の遊戯法などを提言している。

なお明治30年代には遊戯は全盛を極めるようになったようである。明治33年（1900）『小学校令』公布以後の状況を報じた記事に「運動遊戯の流行また甚だ盛んに、白髪の老先生若き男女の教師と手を携へて、遊戯の講習に余念なきは、恰も森文相の時代に、銃剣術を伝習せしと、前後相応じて近時の一大奇観なりとす、かくて小学児童の遊戯は其全盛を極め、如何なる寒村僻地の単級小学校と雖も、手踊り舞子の業に類したる遊戯を見ざるはなきに至れり、世に流行ほど恐ろしきものはあらざるなり。」⁽⁴⁷⁾とあり、その流行振りはまさに森文政期の銃剣術の流行に比肩しうる程であったようである。

(4) 地方における戸外運動（「天然ノ体操法」）

先程引用した明治24年11月制定の『小学校教則大綱』に「土地ノ情況ニ依リテハ体操ノ教授時間ノ一部若クハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戸外運動ヲナサシメ又夏季ニ於テハ水泳ヲ授クコトアルヘシ」⁽⁴⁸⁾と戸外での運動について規定されていた。そうした規定には、視学官等によ

る地方状況の視察がある程度反映したものと思われる。次は『東奥日報』に掲載された「地方小学の教育」と題する記事である。

漁村若しくは山間の僻地にてハ学龄児童間に天然の体育法あり或ハ海水ニ浴泳し或ハ山野を跋渉し鹿を逐ひ魚に伴ふて遊戯するの間に知らず識らず適當の体育を行ひ居るが上に窮屈極まる体操を学課の中に加ふるは過度の体育を為すの恐れあり是れ大に教育家の注意すべき事なり殊に北海道の如きは尤も注意を為すべき事なりとの説教育社会に行はれ居しが先頃当青森地方より北海道に掛け地方教育の實際を視察する為出張したる中川視学官⁽⁷⁷⁾帰京の上は北海道教育の方針に多少変更あるならんといへり（傍点引用者）⁽⁴⁹⁾

すなわち特に自然に恵まれた北海道などにおいては、市街地以外の学校は運動場や雨天体操場などの施設の不備もあって戸外での運動がさかんにおこなわれたようである。『北海道教育会雑誌』掲載の学事報道記事に「普通体操ハ各校概ネコレヲ行ヘリ皆矯正術及徒手ニシテ咄鈴球竿ヲ供フルモノハ三市街ヲ除クノ外一ニ校アルノミ市街ニテハ戸内或ハ戸外ノ体操場ヲ有スト雖トモ村落ニテハコレナキモノアルヲ以テ前浜丘陵或ハ曠地ニテコレヲ行ヒ若シ雨天ノ際ハ他学科ニ替ヘ或ハ教室ノ机ヲ形付ケ其ノ場ニテ行フト云ヘリ兵式体操ハ高等科学校皆コレヲ行フ函館区ノ如キハ殊ニ軍人ヲ雇ヒ以テコノ科ヲ担当セシム整備頗ル觀ルヘシ、体操科ハ普及タリト評スベキナリ」⁽⁵⁰⁾と、体操が戸外の「前浜」「丘陵」「曠地」などで盛んにおこなわれていることが報じられている。

先程の記事は、そのように戸外での天然運動が十分おこなわれるうえに、さらに窮屈な学科としての体操を課することは、体操「過度」との批判が教育界に生じつつあったことを報じているが、当時の体操廃止論ないし軽減論には、児童の家事手伝いなども「実地応用の体操科」になっているといった父兄の言い分も存したようである。すなわち某記事には「独り体操に至ては皆学校内の一科業として学び、家に在る時、外に遊ぶ時、之を復習せんと念慮出でず。…手を振り首を傾くるの体操を以て、生徒日常の進退に応用せんと欲するは、如何にも至難の事たりと雖も既に運動の一種たる以上は之を応用する極めて易々のみ。即ち生徒をして朝夕水を撒き箒を取り又は洗濯水酌みに従事せしめよ、是れ実地応用の体操科なればなり。」⁽⁵¹⁾と報じ、また「地方小学校の体操」と題する論説は、体操のマナー化が生徒の倦怠を招き、「或は病気を云ひ立或は逃げたり隠れたり其時をまぬが

るゝの模様あり」⁽⁵²⁾と述べ、相撲や柔術も試みられているが、怪我や身体の故障が少なくないこと、そして「兎角地方の学校にては朝夕家業の助成にて十分体育を為すに足り別に体操を施すに及ばざるべしと父兄には論ずるもの多し」⁽⁵²⁾といった状況を伝えている。

以上、青森県津軽地方における学校視察の模様、そして特に体操実施の状況について考察してきたが、次に弘前私立教育会での中川の演説について考察することにする。

3. 弘前私立教育会における演説——東京遊学の弊——

(1) 東京遊学に関する中川の意見

弘前私立教育会における中川の演説内容は、前掲の『東奥日報』に「先づ弘前地方教育の一般に進歩するを述べ次に小学校教員任用法の大切なことおよび少年子弟の妄りに東京に遊学する悪弊を痛嘆し地方に勉学せしむるの急務なるを論じて退壇せり」⁽⁵³⁾と報じられていたように、地方の青年がみだりに上京遊学する風潮を厳に戒めるものであった。ところで中川は、6月10日に盛岡で開催された岩手教育協会においても東京遊学の弊について演説しており、⁽⁵⁴⁾弘前での演説もそれとほぼ同趣旨であったと思われるので、ここで岩手教育協会における中川の演説を再録することにする。

中川はまず中学校生徒の中途退学が極めて多いこと、そして彼ら中途退学や転学する者は、そもそも学問を修める資格や資力がないのに朋友などに誘われて中学校に入学する者に多いこと、また資力はあるが志が他に転じたり、特に東京など都会に憧れて中途退学して上京するケースが多いことを指摘する。

中学校生徒ノコトニ付キマシテハ、豈只此地ノミナラス、他ノ中学校モ同感テゴザイマセウ、随分入学シテ来ル者ハ沢山アリマスガ多クハ半途ニシテ、退学シテ仕舞ト云フヤウナ有様デアリマス、夫レニハドウ云フ訳ガアルカト云フニ、中学校ニ入学シテ学問ヲ修ムル丈ノ資格資力ハナイノニ、只朋友杯ハ誘ハレテ入学シテ来ルヤウナ者モアリ、又資力杯ハアルカ故ニ忽チ他ニ転スルノ念ヲ起シテ去ル者モアル故ナラン一時青年子弟ノ心ノ変リ易キ所デ、東京ノ何学校ニ入学シタイトカ、実ハ東京ト云フ所ニ行ツテ見タイト云フ所カラ半途ニシテ退学スルヤウナリマス、⁽⁵⁵⁾

そして東京は決して学問をするのに適切な土地ではないこと、特に精神や思想の定まらない青少年期においては地方の清閑な土地、例えば仙台あたりが高等中学校も

あり、当地と風俗にさほどの相違もなく適当であると述べる。

ソレハ東京ト云フ所ハ学問モ出来ルデゴザイマセウ、出来ルデゴザイマセウガ、何ニ致セ、只今モ中学校デ校長サンカラ統計表ヲ拝借シテ見マシタ所ガ、私立ノ各種学校ニ、這入ツテ居ルモノ、数ハ甚タ多イノデ実ニ慨嘆ニ堪ヘンノデアリマス然シ以前ニ於テハ中学ヨリ尚ホ高尚ノ学科ヲ修ムルノ所ノ階梯ハナカッタカラ東京ニ出ルト云フノモ尤ノ次第デアリマシタガ、今日トナリテ見レハ、サウ云フ「ハ無クナツタ筈ダ、乃チ高等中学校ノ設ケカアリマシテ此地方ノ者ノ為ニハ仙台ニアリマスルカラ、コレヨリ段々高等ノ学問ヲ仕ヤウト云フニハ、マヅ中学校ニ這入ツテ其課程ヲ修メ、而シテ卒業シタ上デ、高等中学ニ行クト云フコトニ仕度イト思ヒマス、是迄青年子弟ニハ、色々ノ事情ヨリシテ、父兄親戚ヲ困ラスト云フコトハアリマシタガ、ソレハ乃チ不完全ナル所ノ教育ヲ受ケテサウシテ徒ニ遊蕩ニ計リ長スルト云フ有様ダカラデアリマス、如此コトハ国家ノ為メニ謂フヘカラサル變動ヲ来サウト思ヒスマスル、⁽⁵⁵⁾

実ニ中等教育ニ付キテハ、注意ヲ促サシハナラス「デゴザリマシタ、…彼ノ青年子弟ヲ上京サスル所ノ利害得失ノ」ニ付テハ、マヅ此ノ人間ノ発達上ニ就テ、御勘考下サルレハ分ル「デアリマス、精神ハ薄弱デ思想モ未タ堅マラスモノガ、東京ニ行キテ色々ノ外形上ノ欲情ヲ惹起ス所ノ種々ナルモノヲ見テ心ヲ動カシ様々ニ脳力ヲ費ヤシ、快樂ノコト計リ重ニスル様ニナツテ学問ニ尽ス所ノコトハ粗造ニナツテ参リマスルカラ、終ニ放蕩ニ流レ覺ヘスト宜シキコトノ覺ヘル様ニナリマス、惟フニ幼稚ノ時ノ教育ト云フモノハ、成ルヘク清閑ノ地ニテ為スノカ良キコトデアリマスル、夫カラ卒業シテ後ニ段々ト高イ所ニ踏ミテ行クヤウニスヘキモノデアリマス然ルヨ一足飛ビニ東京ニ手放シテヤルト云フコトハ、甚タ危険千万ナコトデアリマス、先ツ仙台位デアリマスレハ、余リ遠クモナシ風俗人情モ余リ異ツテモ居ラナイカラ、成ル可ク東京ニ出サズ仙台ノ高等中学ニ入レタラ宜シカラウ、⁽⁵⁶⁾（傍点引用者）

確かに東京は衣食住など生活は便利かも知れないが、下宿料はじめ観劇や飲食など生活経費を比較すると地方がはるかに安価であること、「又区域モ甚タ狭イカラ自然ニ学校ノ監督モ行届キテ悪風習ニ染ムルコトハナイ」⁽⁵⁵⁾と地方の利点をあげる。もっとも東京遊学生の中

には謹直にして学業を成就する者もないわけではないが極めて僅少である。結論として「先ツ一言ニ申セハ決シテ東京ニハ出サンヤウニシデ、思想ヲ確實ニシテ見据ノ付ク迄、高等中学ニ入レテ、サウシテ後ニ茲テハモ一学問ハ出来スト云フ所テ、順序ヲ経テ上京スルト云フ」ニナレハ、誠ニ宜シイ地方テ出来ナイカラ東京ニ出テ、夫々目ザス所ニ入学スルト云フコトニ致シタイコトダ、⁽⁵⁵⁾と、思想が未だ固まらない青少年のうちはなるべく地方で勉学すべく、安易に上京する風潮を厳に戒めていた。

ところで明治20年代当時、立身出世を夢見ての地方青年の上京熱がいかに盛んであったかは、明治26年刊の『少年子』の次の文章にも優に窺えよう。

東京なる哉東京なる哉、東京とは如何なる希望の土地ぞ如何なる愉快の土地ぞ、東京は固と帝国の首脳宮城あり、政府あり、学校あり、金満家あり、実に東洋文明の中心、亜細亜随一の大都府たるに相違なきなり。されど顧みて此絶東の巴倫府が如何に地方少年の希望を吸着しつゝあるかを見れば、実に一種の魔薬がその中に配剤されつつあるを見出すなり。東京は実に彼等が希望の「オリムピア」功名を争ふの「ウヲタル」一たびも其土を踏まざるは以て彼等一生涯の恥と為す。…東京は実に知識の戦場、郷里の変則中学や村落私塾に在て、三年学ぶも京に三日昼寝したるに如かず、是非とも此処に遊ばざるべからずとは、常に地方少年の熱腸より迸り出るの述懐、脳髓の奥底より絞り出されたるの憤言、而して出京の念は絶えず澎湃として彼等の胸に鼓動しつづあるなり。…⁽⁵⁶⁾

『岩手学事彙報』にも次のような「東京遊学案内」が掲載されており、盛岡方面からも東京に遊学する青年が多かったものと思われる。中川の演説の背景には、そうした盛岡地方の状況が考えられよう。

地方有為の少年にして東都に遊学を試みんと欲するも、学校の選定、入学の手續等不案内の爲めに躊躇する者あるハ余輩の屢々耳にする処にして、少年諸氏の爲めに遺憾とする所なるか、少年社会の先導者たる少年園主は早く此に見あり、東京遊学案内なる一冊子を発行せられ、少年東遊者の案内をそ企てたる、首巻には遊学者の指鍼として、修学上の注意より品行、衛生、経済、交際上の注意を促されたるは以て其反省を求むるを得べく中編には府下各学校の規則を列举せられたるは以て其学校の目的組織如何を伺ふを得べく、下編には入学試験問題あり、以て

其入学の模様の一斑を知り得へし、東都に遊学せんと欲するの少年、之か案内に因て将来の目的方向を定めらるゝに於ては、蓋し前途に迷ふの憂なかるべし、⁽⁵⁷⁾

(2) 弘前地方における東京遊学の状況とその弊害

中川は、弘前でも同様の演説をしたわけであるが、弘前地方においても青年の東京遊学が増加しつつあったようである。明治24年6月21日刊の『東奥日報』に「都会の遊学生」と題する「社説」があるが、「弘前学生の気風大に頹敗したるものを歎き予輩へ前号の紙上に於て矯正策を講ずるの甚た急務なるを論せり」⁽⁵⁸⁾と、弘前の学生の気質が「質素剛直」から「輕藻怯懦」へと頹敗しつつある傾向を述べ、その主たる原因として「東京遊学生の業成らずして帰れるものゝ感染によれり」⁽⁵⁹⁾と指摘している。

東京への遊学生は年々増加傾向にあり、明治24年当時は全国で10万人を数える程であったというが、青森県は「地僻にして路遠きを以て余りに遊学生の多からざるも猶三百名を下らざる」⁽⁶⁰⁾状況であったという。「在学学生表」⁽⁶¹⁾によると津軽五郡と弘前一市で140名程で、いくらか脱漏はあるが仮にそれを現数とし、それに南部三郡からの遊学生60名を加えると合計200名となる。その数から類推して明治10年から本年までの15年間における遊学生は少なくとも1000人は下らないことになる。ところでその15年間における東京遊学生のうち高等学校を卒業し、相応の地位を保っている者はわずか50名内外に過ぎないこと、すなわち東京遊学生のうち成功する者は僅か20分の1に過ぎない実情を述べ、その主たる原因は、いろいろと誘惑多き都会の環境にあることを指摘している。

京地の浮華に誘はれて虚飾遊蕩に流れ身を誤り志を失ひて徒に帰郷するあり…外圀の空氣は學生をして自然浮華に流れしめ衣服飲食の奢侈に導くのみならず社交ハ之を誘ひ蜚雪勉強孜々として寸暇なしと報しつゝ碁将棋西洋骨牌花合せにて日を送くれる者あるを見せしめは地方の父兄之れを何とか云はんや一旦父兄の怒りに触れ業を半はにして郷國に帰る来るも宿癖容易に去り難く郷友を誘ひ劇場寄席飲食店に出入するを教へんには無邪氣なる地方の學生にして何心なく質素剛直も漸次侵潤して輕藻怯懦に失するは怪しむに足らざるなり⁽⁶²⁾

なお彼等は、自らが勉学を放棄するばかりか帰郷して地方在住の青少年にも悪影響を及ぼしている現況を指摘、「その父兄たるものおよび他日子弟を遊学せしめんとす

るもの猛省を加へざるへけんや」⁽⁶³⁾と子弟に遊学を勧める父兄にも猛省を促している。

当時、地方青年の都会遊学の是非については、学問の蘊奥を究めるためには学芸の淵藪たる東京にしくわなしとする賛成論と、繁華な都会の環境は刺激も多く悪風習に染まりやすく、学生の思想散乱を招き学業に専念しがたいとする反対論、すなわち「京華的教育」論と「地方的教育」論との間で論争がおこなわれていた。『東奥日報』にも「京華的教育」および「地方的教育」と題する論説記事が掲載されているので、その論旨を紹介しよう。

まず「京華的教育」の論旨であるが、今日の中央集権の時代においては政治、経済、文化等すべてが東京に集中している。学校も同様で、帝国大学はじめ官立学校はすべて東京にあり「高等中学校すら各地方ハ殆ど顔色なくして独り第一高等中学校のあるを知る其他私立の各学校千百算なく宛然日本の学校地を以て居り日本人をして東京にあらされは修業の出来ぬもの此地に遊学せされバ真人間となり難きの感あらしむ」⁽⁶⁴⁾状況で、まさに「京華的教育の勢力も偉大なりと云ふべし」⁽⁶⁵⁾という。したがって学問をもって身を立てんとする者はすべて東京遊学を志すのであるが「初めは京地書生の浮華輕藻を唾罵せり漸くその地に馴れ来りて雅語都様の学び難きを歎けり終りに至り自ら都人士を以て居り郷人を田舎漢視して交際の広く才識の高きを誇れりこれ一般遊学生の情勢にして学芸の高卑其業の成否に閑せざるなり」⁽⁶⁶⁾といった情勢が惹起される。したがって「その業を遂げその学を卒ふるものハ千百人中の一人にして多くは交際學にその時間と學資を抛ちこれか爲めに志を失ひ其業に踉蹌し空しく帰郷するも得然として交際馴れたるを誇り傲然として郷黨を下視せり而して所謂交際學に得る所ハ何ものぞ奢侈遊惰妄想輕浮空々漠々不生産の具のみ」⁽⁶⁷⁾といった悪弊がもたらされ、「東京は学芸の淵藪立身遊学の好地とハ云へ決して浜の真砂を拾ふか如く容易の事にはあらざるなり」⁽⁶⁸⁾といった実情であるという。そして「独立事を処するの識を備へ磨して礪せざるの志操確立するにあらされば遊学の害あるもその利を見ざるなり…人の人たるへき徳行を修め志操確実なるへき要素を養ふは地方的教育にありて京華的教育は技芸を備へ交際に慣れ日本の華飾たる其地の外相と同じく人間の華をつくるの用に供すると知るべし」⁽⁶⁹⁾と述べ、まだ志操が十分確立していない青少年期の都会遊学は弊のみあって利なしと結論づけている。

次に「地方的教育」の要旨をみよう。論説子は、地方分権を望む者として地方教育の振興への期待を述べる。ところが今日の状況は「華飾的の京地にあらされば華飾を修むるの華飾学校を設立すへからざるの觀あり」⁽⁷⁰⁾と

いう具合で、地方に学校を設立することは財政的にも困難な社会的風潮があると指摘する。しかし自分がかつて同新聞において「遊学生の余弊」「京華的教育の短所」を評論したように、本県からの遊学生の員数の概算は300名、その学資を一人100円とした場合、本県一年の遊学費用は3万円。これを仮に少なく見積もって2万5千円としても、本県内の高等学校たる尋常師範学校、尋常中学校および東奥義塾3校を合わせた1年の経費より1000円上回るものであると述べる。このように経済上からみても京華的教育より地方的教育がまさるとするが、さらに「地方的教育の長所へ経済上の損得にあらず寧ろ形而上の大得あるにあり外圍の繁華眼に入らずその従ふ所の学芸を専攻し滿眼の風物愛郷の情を切ならしめ接する所の親戚知己奨励を加へざるあらされ徳行高く勉勵深く志操確実研究精蘊たるへき京華的教育の遠く及はざる所にして二万五千円の金錢にて償ひ得ざるの至宝なり地方の真志士宜しくその得失を計較して猛省する所あれよ」⁽⁶²⁾と地方の長所は経済面のみでなく青年の勉学の環境として好適である点を強調する。以上、青森県の地方紙である『東奥日報』は、「地方的教育」支持論を展開している。教育環境としての地方の奨励は、日本だけでなく西欧諸国でも支配的論調となっていたようであるが、論調としてはそうであっても現実に東京遊学が増加する傾向は抗し難いものであったようである。

(3) 明治中期における学生の風儀問題

東京遊学にまつわる学生の風儀問題は、明治20～30年代における全国的な教育問題となっていた。明治24年(1891)1月1日刊の『教育報知』の社説「明治廿四年を迎ふ」のなかに、「田舎の有為なる青年を都下に吸収して、之を塵埃粉々たる、腐敗の空気を呼吸せしめて、其男子の心腸を糜爛せしむることハ、国家上の輕綸默視すべきことなりや否や。」⁽⁶³⁾と、東京遊学の問題が指摘され、そして同雑誌の3月刊には「学生の風儀を論ず」と題する社説記事が2回連載されている。それによるとまず「少年の志操は多くは外形の現象これか精神の激因となりて、知らず識らず心志を変易せしむるもの」⁽⁶⁴⁾である故に「社会の風儀乱れたる境遇に於ては、自ら学生の心志を蕩し、随つてその風儀を破るも、これに反して会社の土風修りたる時代に於ては、自ら学生の志操を高め、随てその風儀を保つものなり」⁽⁶⁵⁾と、青少年にとって社会の風儀の影響がいかに大きいかが指摘される。そうした観点から明治維新前後以来の社会の風儀の変遷をみると、維新前にあつては封建的秩禄分限を守り、武道の鍛錬など「内外相応して学生の心志を陶冶」⁽⁶⁶⁾していたが、明治維新以後は「道義の制裁ハ毫も社会の干渉せざるが

如き有様となり、遂に学生の風儀まで一朝頹敗の傾向を生じたり、…今日我国の情態を通観するに、世人は唯自己の營利に汲々とし、肝要なる社会の風儀、国家の道徳に於ては殆んどこれを度外に置けり」⁽⁶⁷⁾と学生の風儀が頹廃してきたことを指摘する。また世間は女子学生の風儀にのみ注目しているが、男子学生の風儀こそが問題であるとし、今の学生と昔の書生を対比して次のように述べている。

今の学生は昔の書生に異り、今の学生は外面驕傲にして昔の書生ハ外面謙直なり、今の学生は内心貧慾ありて昔の書生は内心淡潔なり、今の学生ハ怠惰にして昔の書生は勤勉なり、今の学生は放逸にして昔の書生ハ素朴なり、今の学生は柔弱にして昔の書生は勇氣あり、今の学生は諂諛にして昔の書生は気概あり、今の学生は輕躁にして昔の書生は沈着なり、今の学生ハ生才氣ありて昔の書生ハ馬鹿正直なり、外面の見掛を以て判断を下さば、今の学生ハ遥かに昔の書生に優ると雖も、実力の輕重を以て比較を採らば、昔の書生は今の学生に勝るや数等なり、⁽⁶⁸⁾

この論説はさらに、上述したような学生の風儀を醸成した原因をあげる。まず第1には「柔弱淫侈の小説に耽る」⁽⁶⁹⁾ことである。それら小説は少年の気を蕩かすものであり、彼らは学資を投じてそれら小説を購ひ、日課を怠つて終日下宿屋に眠起し、勉学の念なく、不良の遊戯をなし「遂に無類の徒となり空しく故郷に帰るか如きは比々皆然り、蓋し都下少年の大半は此流を以て充たすものと謂ふも誣言にあらずるへし、」⁽⁷⁰⁾と述べる。

第2は「生産の実業を賤み、不生産の虚学に耽ること」⁽⁷¹⁾である。例えば農家に生まれた者が文学を志したり、商家に生まれた者が哲学に耽ったり、工業家に生まれた者が業を賤し法律を志すといった風潮をあげる。この傾向は青森県にもみられた。『東奥日報』に「青森県遊学生と数学科」と題する記事があるが、青森県から東京への遊学生は約300名という数は、他県に比べて特に少ないわけではないが、彼らのうち完全な官立高等学校に入る者は極めて少なく、また彼らの多くは法科政治科などを修めており、工科や理科のような実業科を修める者が僅少な実情をあげ、「いと貧弱なる国にありながら生産的の業を修めず不生産的の業を撰むものゝみ多く見ゆるは其故如何」⁽⁷²⁾と難じている。そして、数学の成績が不振で入学試験に及第しうる者が少ないというのもその原因のひとつであるから、「地方の教育に従へる諸氏にハ一層数学の授業法に注意ありたしと東京新下りの学生は嘆ち居れりと」⁽⁷³⁾と提言している。

なお文学や法律学などは不生産的な学問であるばかりか、例えば法律を学んだ者が「これを奇貨として不良の思計を逞ふし、常の善良なる学生を陥れ、剩へ世人をして往々その実を受けしむる」⁽⁶⁶⁾事態さえもみられるという。すなわち統計によれば、かつての犯罪者は無学無知識の徒が多かったが、今日ではむしろ「教育を受けたる人上」、なかでも学生に多いという状況をあげ、かかる点からも生産的な実学を修めることを奨励する。

第3に明治初年以降の教育施政の要因をあげる。すなわち明治初年の『学制』以来、わが国は欧米の学校制度を模倣してきたが、内面の教訓に欠けるところがあること、不生産的教育を奨励し生産的の学校を疎遠にしたこと、道徳の方針を定めず知識の教養に偏し、体育に傾き、美育を唱えるなど方針が不定であったことなど「此等の教育ハ或ハ外面より或ハ内部より少年子弟の志操を動かし風儀を破り遂に今日の境遇を媒出せしめたり、蓋し維新の大業ハ専ら創始に出づるを以て揆乱反正の際此等の弊害を偶生せしむることハ素より止むを得ることなれとも抑当路者の注意その深からざるより若く学生監督の方法を寛假するに至りしハ惜みても猶余りあることなり」⁽⁶⁷⁾と述べる。そして私立学校のような「営業学校」は「唯その学生の甘心を買ひ毫も検束を加へず遂に生徒をして自由放逸ならしめ」⁽⁶⁷⁾という現状があり、一方、官立学校も「学校外に於ける生徒の品行ハ毫も干渉を加へず下宿屋の樓上に独居せしめて更にその行為に頓着せざるか如き」⁽⁶⁷⁾現状は、国家が莫大な費用を費やして有為の子弟を養成するとの目的からみると「随分不親切のこと」云々を述べ、⁽⁶⁷⁾と私立、官立いずれの学校も問題があるという。

最後に、上記以外に社会の風儀を害している要因として出版、寄席、新聞雑誌、小説稗史、講談演説などをあげる。すなわちそれらの政治上に渉るものについては監督もゆき届いているが、「風俗に関し人情に係るものに於てハ往々淫猥浪蕩の事実あるも猶これを看過するか如きハ吾儕の屢々見聞するところ」⁽⁶⁷⁾と述べ、さらに「近來百般法律の制定頻繁なるより國民をして専ら法律思想のみを養成し毫も道徳思想の発達を助けざりしハ教育上最も弊害を受くるものなり」⁽⁶⁷⁾と法律思想のみでなくもっと道徳思想を涵養すべき必要を提唱し、そして今後の具体的矯正策として、風教に関する警察事務を厳重にすること、学校生徒の検束法を設けること、不生産的の学校を節減し生産的の学校を奨励すること、宗教学校の監督法を設けること、などを提言している。

「学生界の風紀」と題する明治30年（1897）の『教育報知』の記事も、当時の学生の風紀について次のように指摘している。

学生界の風紀、亦た社会の悪習に感染して漸く乱離し来れり、就中都門の学生界に於てその甚たしきを見る。正科を怠りて寄席芝居小屋に出入し教科用図書を購入す可き資を挙げて小説本を需むるものゝ如きは、恰も書生社会の常態として愧ぢざるの風となれり。志操の不確実なる少年青年者を都門に遊学せしむるの非たるや、必竟此等の点より唱破せられしなり。⁽⁶⁸⁾

寄席、芝居、小説など、出版物や様々な娯楽などが学生、青年に与える影響の問題については、当時「社会教育」の呼称のもとにした盛んに論じられている。例えば「社会教育と新聞紙」と題する明治27年刊の『教育報知』の記事は、「都下百万の男女は、概ね彼の小新聞に依て社会教育をうくるなり、而して小新聞紙上の記事は如何に。紙面の半ば以上は小説を以て充たし、その他の二分の一以上は卑猥読むに堪へざるの記事を以て満たし、而して読むものゝ多数は、此の小説と此の記事とのために之を愛するなり。」⁽⁶⁹⁾と、新聞に掲載される卑猥な小説や記事の問題を指摘し、今後の対策として風俗壊乱に関する取り締まりを強化すること、淫猥の記事を避け、赤誠勸善懲惡の意を以て筆法を謹むべく新聞同業者相互の規約を設けて自主規制するとともに、その盟約に反した場合は社会の世論をもってその新聞を廃絶せしめることを提言している。

明治31年には『教育時論』に「社会教育論」と題する社説記事が連載され、演劇、寄席、稗史、小説、新聞、雑誌などの改良が主張されている。例えば寄席についての論説は次のごとくである。

此等寄席に於いては、門朝の塩原多助の如き有益なる唱は、甚だ稀れにして、其の多くは、姦夫淫婦談、又は妓女談等にして、其の少年者の不良心を開誘し、之を惡に導くこと、蓋し測り知るべからず。その他、長唄、常盤津、新内、都々々等、諸の鄭声猥褻の歌曲は、皆是寄席が中枢となりて、以て社会に播伝せしむるもの、此等の諸点に於いては、寄席は、学校と全く反対なる影響を社会に与ふるものになるが故に、学校教育普及上進の消極的方便として、此の種猥褻卑陋なる寄席は、一切禁止し、而して軍談講釈類の寄席を、盛ならしむるを可とす。⁽⁷⁰⁾

また学生生活において、下宿にも問題があったようである。明治33年（1900）刊『教育時論』に「学生墮落の原因其救済法」と題する記事は、都下の学生の墮落は、特に私塾ないし中学程度の16～7歳までの青年に多いこ

と、その原因として下宿屋が不完全で飲酒が自由であること、高利貸がみだりに貸与すること、骨牌の遊戯、女義太夫、不健全不潔の文学、下宿屋の下女、紳士の不徳不義、師弟の情誼が失墜し学問が売買的になったこと、また看護婦会や下宿住居の女学生などにも書生墮落の誘因があることが指摘されており、したがってその救済法として地方より中学程度の書生を東京に送らないこと、東京に家庭的寄宿舎を設け主婦がそれを監理すること、食物の不充足さが学生の不平のもとであることから、それら寄宿舎は特に旧藩主が慈善的精神をもって計画すること、警視庁は取り締まりを厳重にし、放蕩学生の月表を作り各学校に回送すること、書生をして教会や学会に関係を深めさせることなどが提言されている。⁽⁷¹⁾

唐沢富太郎著『学生の歴史』には、明治期の学生の下宿の実態について詳述されているが、「貸問あり賄付娘附」との川柳にも風刺されているように、特に母親と娘とで経営する素人下宿の中には、将来有望な下宿学生と娘とを結婚させようと策略を弄する下宿が少なくなかったこと、そうした下宿結婚が当学生と郷里の両親との間に葛藤を惹起する場合が少なくなかったこと、二流三流の下宿屋にあっては、客を吸収しようと暗に醜業婦を入りさせたり、女中がその対象となったりしている例もみられたという。⁽⁷²⁾

以上、弘前における中川の演説を手がかりに、当時の教育問題について考察してきた。まさに学生の風儀問題は、明治中期における全国的な教育問題であった。中川が、盛岡や弘前など地方教育会において青少年の東京遊学の弊害を指摘し、地方で堅実に勉学することを奨励したことは、まさに当時の教育問題、とりわけ中等教育段階の青少年教育の問題の所在と課題を示すものであったと言うことができよう。

さて、弘前で視察と演説を終えた中川は、次に秋田県を巡視することになるが、秋田県に移動する途次において南津軽郡の学校を視察している。最後にその視察の模様について考察し結びとすることにする。

4. 中・南津軽郡の学校視察——結びにかえて——

2日間にわたる弘前市内の学校視察と教育会での演説を終えた中川は、7月12日は弘前に宿泊、翌13日に弘前を出発し秋田県に向かうが、その途次において2～3の学校を視察している。『東奥日報』に「文部視学官中川元氏へ去る十二日弘前市を出発し秋田県に趣きたるか途中中津軽郡隆親小学校南津軽郡長峰小学校を参観する筈なりしといふ」⁽⁷³⁾との報道がある。(なお記事中「十二日」とあるのは「十三日」の誤りであることは今までの考察からも明らかであるし、中川の『日記』にも「七月十三

日」と日付が記されている。)なお中川の『日記』によると、上記の2校に加え、青森県と秋田県の県境にある碓ヶ関尋常小学校も視察している。

さて中川の『日記』をみると、隆親尋常小学校⁽⁷⁴⁾においては3年と4年の作文、1年の数方、2年の珠算を視察、長峯尋常小学校においては1年の書取、2年の作文、3年の書取、4年の修身を視察している。なお修身については「生徒写本ヲ持ツ」と記され、「写本」との記述部分から線をひいて「幼学綱要」と注記されている。『幼学綱要』は明治10年代以降の儒教主義的徳育政策のもと全国の各学校に下賜されたものであり、⁽⁷⁵⁾長峯小学校でも生徒各自がその写本を所持し、それをテキストに授業がおこなわれていたものと思われる。「a」との評も付記されている。また隆親小学校については「補修科」とメモされているが、長峯小学校については「温習生 讀書 国史啓卷二 第二年生 高等讀本第一年生」と温習生の存在、および使用教科書が記されている。

次に碓ヶ関尋常小学校については、次のように記録されており、3年、4年と温習生の読書が合併で、また1年と2年の習字が合併で、すなわち複式授業がおこなわれていたものと思われる。

第三年生讀書
第四年生全
温習生 讀書 新讀本第六
第一年生 習字
第二年生

さらに「当地村長基本財産ヲ漆木ヲ植ヘ以テ之ヲ作ルト云フ漆木ハ此辺ニ適スト云フ年々苗木ヲ植スル」三千本トスルト云フ地面ハ多分アリト云フ」と、有名な“津軽塗”のもとになる漆木の植林に関する記述がある。中川は、青森県八戸で開催された東奥教育会における演説メモに「○基本財産ノ」、寄附金、樹林養成ノ」と記していたが、宮城県や岩手県における養蚕、北海道における酪農、青森県における樹林養成、そして次に考察するが秋田県大館高等尋常小学校における桑樹の栽培や野菜の栽培など、それぞれの地方における農林業など産業の振興についても、学校基本財産という観点から大いに注目していたことが察せられる。⁽⁷⁶⁾

中川の、青森県津軽地方に続く秋田県巡視についての考察は稿を改めることにして、最後に中川の5日間にわたる青森県津軽地方における巡視行程について一覧表に整理しておくことにする。

中川視学官の青森県津軽地方の巡視行程

7. 9(木)	朝、函館より船にて青森に到着。直ちに黒石町に赴き南津軽郡竹鼻尋常小学校と栄進尋常小学校を視察(校舎のみ) (黒石泊)
10(金)	午前中、黒石高等小学校と黒石尋常小学校の授業を視察。午後、黒石高等小学校桜上に於いて教育講演会。中川は教育に関して演説。郡内の教員、町村長、篤志者等100余名参加。 (黒石泊)
11(土)	早朝、黒石を出発。午前9時、弘前に到着。弘前市内の弘前高等小学校、時敏尋常小学校、朝陽尋常小学校、城西尋常小学校、東奥義塾の授業を視察。 (弘前泊)
12(日)	午前8時より12時半まで大成尋常小学校、和徳尋常小学校の授業を視察。午後1時より弘前高等小学校において弘前私立教育会に臨み演説(弘前地方の教育の進歩、教員任用法、少年子弟の東京に遊学することの弊など)。終了後、茶話会および延年桜にて招待会。参加者70余名。 (弘前泊)
13(月)	秋田県に向かう途次、中津軽郡隆親尋常小学校、南津軽郡長峯尋常小学校、碓ヶ関尋常小学校を視察。秋田県大館に到る。 (大館泊)

※中川の『巡視日記』、『東奥日報』、『和徳小学校記録簿』、『弘前市教育史』などより作成。

注

- (1) 拙稿①「明治24年における中川視学官の第二地方部学事巡視の研究——その1・宮城県内の巡視行程を追う——」『弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所紀要第4号』1992・8 拙稿②「同上——その2・岩手県内の学校視察と演説——」『弘前学院大学・短期大学紀要 第29号』1993・3 拙稿③「同上——その3・青森県(八戸・青森)と北海道の学校視察と演説——」『弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所紀要 第5号』1993・6
- (2) 「視学官」『東奥日報』696号(明24・7・9) 2面
- (3) 栄進尋常小学校と竹鼻尋常小学校は、ともに明治11年に上十川に創立した学校であるが、明治25年11月に両校が合併、六郷村大字赤坂字野崎506番地の畑地を借用、校舎を新築し「六郷尋常小学校」と称するようになる。現在の六郷小学校である。(『青森県教育史 別巻』青森県教育史編集委員会 昭和48年 727頁)
- (4) 注(1)掲出拙稿③
- (5) 「黒石に於ける中川文部視学官」『東奥日報』699号(明24・7・14) 2面

- (6) 『黒石小学校百年史』所収「年表」120頁
- (7) 「弘前に於ける中川文部視学官」『東奥日報』699号(明24・7・14) 2面
- (8) 『弘前市立弘前中学 東奥義塾沿革誌』弘前市立弘前中学 東奥義塾 明治41年 9頁
- (9) 『明治以降教育制度発達史(以下『発達史』) 第三巻』96頁
- (10) 『弘前市教育史 上巻』弘前市教育史編纂委員会 昭和50年 662～3頁
- (11) 「陸奥国中津軽郡弘前学事の状況」『教育報知』82号(明20・9・3) 16頁
- (12) 「弘前市高等小学校」『東奥日報』684号(明24・6・24) 3面
- (13) 「時敏尋常小学校」同上紙 687号(明24・6・27) 2面
- (14) 『朝陽百年史』(朝陽百年史編纂委員会 昭和49)に明治24年「七月十一日、中川文部視学官来校巡視せり。」(131頁)とある。
- (15) 千葉寿夫著『明治の小学校』津軽書房 1987年 165頁
- (16) 「今日多くの学校に就て見るに、下はに(小?)学校より、上は師範学校中学校に至る迄、黒板の製造極めて粗なり。其甚としきは、板の合せ目離れ、塗剝剝脱して、木質脱出し、数歩の外に在る者をして、墨痕の何たるを識別するに苦しましむ。斯かる黒板は、善く教授の用に堪へざるのみならず、大に生徒の視力を過勞せしめ、衛生上の害をなす事、鮮少にあらず。近來学校生徒に、近視眼の増加せしは恐くは、此に基づくならん。」(「黒板製造に就て一言す 林 吾一稿」『教育時論』151号 明22・6・25 8頁)
- (17) 千葉上掲書(注15)によると、明治22年6月16日に視学官相良長綱が弘前市内の学校を視察した日も日曜日であったが、視学官が視察に来るというので特に出校日としたという。当時和徳小学校の校長三上徳之助は、日曜日は政府が決定した休日であるから視察に応ずる必要はないと主張したが、他校の校長に説得されてしぶしぶ視察に応ずることにしたという。(178頁)当日の『学校日誌』に「文部省視学官相良長綱本校に至り、一巡の上、四年生体操教授を一覧せり。此の日、日曜なれども同視学官来校に付き特に教授せり。」と記録されている。今回の中川の巡視においても、日曜日の授業視察は他にもないわけではないが、おおむねは旅程にあるか校舎のみの視察というケースが多いようである。
- (18) 前掲『弘前市教育史 上巻』624～6頁。なお『東奥日報』1095号(明25・12・24)に「御真復写の下渡校舎」との見出しで、12月23日に下賜された青森県下の尋常小学校は弘前市5校、南津軽郡12校、西津軽郡8校、中津軽郡11校、北津軽郡11校、三戸郡11校、上北郡11校、下北郡10校、それに少し前に下賜された東津軽郡の7校を加えると総計87校にのぼるものであった。
- (19) 『弘前市教育史 上巻』によると、大成小学校の火災焼失は明治23年3月4日の夜、付近の民家から出火し類焼にあったものであるが、政争が原因の放火との噂がしきりであったという。すなわち当時、大成小学校の熱心な後援者であった寺井純司(改進黨代議士)と大高藏行(弘前市市議員、市会議長)の二に対する政治的な反発から何者かが大成小学校を焼失させる目的で放火したということであったが、確証はなく犯人もあがらなかった。(622頁)校舎焼失後しばらくは校庭に見世物小屋のように箆で張った教室が建てられ、中に箆と箆を敷き二人一脚の椅子を机の代用にして勉強するという有様であったという。(623頁)工事の紆余曲折については、『東奥日報』646号(明治24・5・8)に「大成尋常小学校建築工事の中止」との見出しで、「弘前市大成尋常小学校にて今春早し工事に取にかゝりしその寄附金も余程取り纏りたることなれ共何んか紛議の紛起したる由にて目下其の工事を中止したる

由なるがかくは教育進歩上に大関係を有するもの故生徒父兄は申すに及はずきも心あるもの何つれも紛議の水積して只管その落成を願ひ居ると云ふ実に左もあるべき次第なり」(2面)とある。

- 20 「大成尋常小学校」『東奥日報』689号(明24・7・1) 2面
 21 注38掲出書 663頁
 22 千葉前掲書 165～6頁
 23 当日の中川の『巡視日程』には「弘前第一小学校一覽」と記されているのみであるが、それが和徳小学校であったことが知られる。
 24 『和徳小学校沿革誌』の明治21年3月28日の箇所に「中津軽郡長大導寺繁植、書記成田某、雇永出弥門の三名来校、教授及び新築工事を巡視し、校長の先導にて亀田町の仮校舎に至りて再び教授を視察。特に男生徒の体操及び女生徒の唱歌教授を所望されたり。但し此の日賞品として半紙若干を下附せり。」と記されている。
 25 千葉前掲書 184～90頁
 26 注(1)掲出拙稿の②
 27 青森県公立学校設立条例(十三年四月発)によると「公立学校設置スル地ハ教授ニ妨ゲナク又健康ニ害ナキ所ヲ択ブベシ、就中左ノ場所ハ最も忌避スベキモノトス」として「一、日当り悪キ地、一、近傍ニ汚濁ノ池水フル地、一、近傍ニ劇場魚市場アル地、一、人家密接シ適宜ノ空地及運動場ナキ地」(以上第五条)となっている。魚市場は忌避すべき場所となっているにもかかわらず和徳小学校では明治18年4月、校庭の約3191平方メートルを年31円25銭の賃料をとって弘前魚市場に貸し付ける契約をしたのである。小学校の校庭を生徒と一緒に魚市場の若者連中が威勢よく走り廻り、そのため学校の体裁は一層醜くかりし、と当時の先生は嘆いていたという。(千葉前掲書 146～7頁)
 28 注(1)掲出拙稿の①
 29 『教科教育百年史』建邦社 昭和60年 432頁
 30 千葉前掲書 145～6頁
 31 「体操科教授上に於ける卑見。埼玉 羽山好作」『教育報知』562号(明30・9・24) 9頁
 32 「女子ノ体操 真山寛演述」『宮城教育会雑誌』21号(明19・9・30) 13～4頁
 33 運動会の模様を伝える地元の『奥羽日日新聞』に「軍歌を謡ふて歩武を整ひ会場に達するや…」「途次行く―軍歌を謡ふて隊伍を整ひ会場に達するや…」「行く―運動歌を謡ふて会場に達し…」などの記述が多くみられた。(拙稿「東北地方(特に宮城県)における体操と唱歌の導入と展開」『弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所紀要 第3号』1991・3)
 34 『小学校事彙』教育学会研究会編纂 同文館 明治37年 第一編 小学校教育の沿革 69頁
 35 「学校歌 岐阜県加茂郡 丹羽辰太郎」『教育報知』125号(明21・6・30) 2頁
 36 「小学校の唱歌に関する雑感 西駿 音狂生」『教育時論』363号(明28・5・15) 22頁
 37 注31と同じ。8頁
 38 「体操科教授上に於ける卑見(続) 羽山好作」『教育報知』563号(明30・9・30) 9頁
 39 「軍歌に対する注意」『教育報知』462号(明28・2・23) 5頁
 40 前掲『弘前市教育史 上巻』には、鉄道開通に続き明治30年の第八師団の設置により、野砲、騎兵工兵、輜重の各隊が統々仙台から移駐してくるなどして「弘前の軍都としての性格が定着するようになった。」(510頁) 田山花袋も、身内が弘前の部隊で青年将校をしていた関係もあって、特に日清戦争後、軍都として活気を帯びてくる弘前の様子について次のように

述べていた。「県庁を青森に取られて次第に衰えた津軽歴代の城市、商業も工業も活気を失って半歳を深雪の中に埋められる淋しい市街も、日清戦役後、第八師団の増設と共に新しい活動の気は到る処に充ち渡った。剣鞘を鳴らして勇ましく街頭を歩み行く青年士官の群は、すくなくとも古く衰えた屋敷町の津軽少女の眼をそばだたしむるに十分であった。」(田山花袋『生』(510～11頁))

- 41 『発達史 第一巻』 438頁
 42 『発達史 第二巻』 256頁
 43 『発達史 第三巻』 41頁
 44 同上書 100頁
 45 「遊戯及体操 斎藤覚次郎稿」『教育時論』172号(明23・1・25) 11頁
 46 「体育私見。(承前) 千葉県 都祭歌之助」『教育報知』426号(明27・6・16) 9頁
 47 注34掲出書 72頁
 48 注40と同じ
 49 「地方小の教育」『東奥日報』707号(明24・7・23) 1面
 50 「上磯外三郡及函館区学事視察ノ状況 会員 久保田為一郎」『北海道教育会雑誌』9号(明24・12・25) 22頁
 51 「体操ハ如何に應用すへきか。」『教育報知』471号(明28・4・30) 4頁
 52 「地方小学校の体操 千葉県 林彦兵衛」同上誌 645号(明34・1・1) 14頁
 53 注(7)と同じ
 54 注(1)掲出拙稿の②
 55 「岩手教育協会総集会に於ける中川文部省視学官の演説」『岩手学事彙報』230号(明24・7・5) 24～7頁
 56 唐沢富太郎『学生の歴史―学生生活の社会史的考察―』創文社 昭和30年 29頁
 57 「東京遊学案内」『岩手学事彙報』231号(明24・7・15) 30～31頁
 58 「都会の遊学生」『東奥日報』682号(明24・6・21) 1面
 59 『岩手学事彙報』196号(明23・7・25)に明治23年調査による「東京遊学生の県別一覽」が掲載されている。それによると以下のごとくである。(23～4頁)

府県	私立	官立	合計	府県	私立	官立	合計
北海道	297	29	326	京 都	383	191	574
青 森	367	66	433	大 阪	454	143	597
岩 手	387	74	461	奈 良	139	29	168
秋 田	428	79	507	兵 庫	614	241	855
宮 城	517	328	843	三 重	513	137	650
山 形	658	187	845	和歌山	380	111	391
福 島	638	140	778	岡 山	580	222	802
新 潟	1332	133	1465	広 島	462	113	575
富 山	394	65	459	鳥 取	316	62	468
石 川	438	429	865	島 根	330	91	421
福 井	497	148	645	山 口	846	383	1229
茨 城	800	125	925	香 川	269	43	311
栃 木	751	62	813	徳 島	255	69	324
群 馬	799	103	902	愛 媛	560	124	684
埼 玉	1007	115	1122	高 知	469	173	642
千 葉	1180	194	1374	福 岡	691	321	1012
東 京	6050	1324	7374	大 分	420	138	558
神奈川	1011	92	1103	佐 賀	502	226	728
山 梨	455	36	491	熊 本	478	279	757
静 岡	1087	227	1314	宮 崎	140	54	194
愛 知	663	171	834	鹿 児 島	67	416	483
長 野	1149	170	1319				
岐 阜	600	144	744				
滋 賀	330	75	405				

なお府県の配列順序は北から順に地方別にまとめた。

明治24年における中川祝学官の第二地方部学事巡視の研究

また『東奥日報』（682号 明治24年6月21日発行）2面には青森県出身学生の「在京学生統計表」が掲載されているが、それは東奥義塾内発兌学友通信第32号に掲載されたものを転載したものである。それによると、青森県出身で東京遊学生の専攻学科別、学校別内訳は次表のごとくである。

＊付記 本研究にあたり『東奥日報』など青森県関係の資料は青森県立図書館および弘前市立図書館を利用させていただいた。また和徳小学校の学校日誌の写真撮影およびその論文掲載については弘前市立図書館より許可をいただいた。関係諸機関に対し厚くお礼を申しあげる。

専 門 学 部		普 通 学 部	
無 形 学	有 形 学	高等学校	6 人
政 治 学 4 人	医 学 6 人	英語学校	1 人
宗 教 学 7 人	農 学 4 人	青山英和学校	7 人
文 学 3 人	工 手 学 9 人	国学院	3 人
法 律 学 28 人	物 理 学 6 人	大成学館	5 人
理 財 学 9 人	画 学 1 人	成立学校	1 人
哲 学 3 人	化 学 1 人	錦城学校	6 人
	速 記 学 1 人	慶応義塾	8 人
	商 業 学 6 人	国民英学会	2 人
	士 木 学 8 人	英学院	1 人
	数 学 2 人	共立学校	3 人
	水 産 学 9 人		
計 54 人	計 43 人	合 計 43 人	
合 計 97 人			

以下、各学校、各学科在学者の氏名が掲載されている。また同紙の712号（明治24年7月29日発行）には「東京諸学校卒業生」との見出しで卒業生の動向が紹介されている。

60 注58と同じ

61 「京華的教育」『東奥日報』683号（明治24・6・23）1面

62 「地方的教育」同上紙 684号（明治24・6・24）1面

63 「明治廿四年を迎ふ」『教育報知』249号（明治24・1・1）3頁

64 「学生の風儀を論ず」同上誌 259号（明治24・3・30）1～3頁

65 「青森県遊学生と数学科」『東奥日報』712号（明治24・7・29）2面

66 注60と同じ

67 「学生の風儀を論ず」『教育報知』260号（明治24・4・4）1～2頁

68 「学生界の風紀」同上誌 546号（明治30・10・9）3頁

69 「社会教育と新聞紙」同上誌 418号（明治27・4・21）1～2面

70 「社会教育論（中）」『教育時論』476号（明治31・7・5）3面

71 「学生墮落の原因其救済法」同上誌 548号（明治33・7・5）20頁

72 注66掲出書 99頁、101～2頁

73 「中川文部祝学官の出發」『東奥日報』700号（明治24・7・15）2面

74 隆親尋常小学校は、明治18年6月1日に為善、水哉、堀越の三校が合併して隆親小学校として設立。20年5月に隆親簡易小学校となり、明治23年に隆親尋常小学校となった。（千葉寿夫『明治の小学校』巻末「年表」）

75 『幼学綱要』明治15年12月に宮内省から全国地方長官に下賜、明治17年2月に文部省から全国の小学校に『幼学綱要』全7巻が下賜された。弘前市の和徳小学校に下賜されたのは同年2月5日であったという。（千葉前掲書 105～6頁）

76 「学事上施設の要件。（各府県学事年報適要）」として宮城県は「児童就学の督励、教員養成、実業教育の発達、学校基本財産の増設」の4項目、青森県は「学校基本財産の蓄積小学校舎及校具等の設備等を完全にし小教員を改良し就学特に女子就学を促す事」があげられており、いずれも学校基本財産の蓄積、増設が将来的課題としてあげられている。（『教育報知』453号 明治27・12・22 17頁）

1993年11月20日稿了